〔翻訳〕

ザストロッツィ―ロマンス（3）

パーシー・ビッシュ・シェリー　著
治　村　輝　夫　訳

第五章

魂がすっかり一つの考えに包まれている罪あるマチルダは，戸口で待機していた馬車にさっと乗り込むと，パッサウに向かって進むよう従者に命じた。

一人思いに耽るに任されると，思いは自分の心に最も近い対象に――ヴェレッツィに――立ち返った。

その胸は消しがたい情熱の火に焼かれていて，彼のことを思っている間に自分の感情の激しさに身震いすることもあった。

「彼は私を愛するのです――彼は私のものになるのです――永遠に私のものに」マチルダは心の中で絶叫した。

パッサウの街の音がラウレンティーニ伯爵夫人の従者の耳に反響しても，彼女は空想から醒めることなく，やがて目的地に着いた。町にある彼女の宿の中で腰を下ろした時も，考えはまだ十分にまとまっていなかった。信頼して何事も打ち明ける召使のフェルディナンドを呼んだ。「フェルディナンド」彼女は言った。「あなたは私から多大の感謝を受けて当然です。私が目的を果たすにあたって，あなたを不誠実だと非難しなければならなかったことは一度もありません。あなたにはすでに恩義がありますが，さらに上乗せしてください。三日以内にヴェレッツィ伯爵を見つけ出しなさい。そうすれば，あなたは私の最良の友です」フェルディナンドはお辞儀をし，彼女の命令を実行する準備をした。二日が過ぎ去った。その間，マチルダはパッサウの郊外でも，直接自分であらゆる探索をしないではいられなかった。

恐れから落ち込むのと希望を抱いて元気になるのを繰返しながら，三日の間マチルダの心は不安と動揺の状態にあった。フェルディナンドが戻って来ることになっている三日目の夕方になった。待ち遠しい思いで極度に張りつめているマチルダの心は，対立する感情がせめぎ合う舞台だった――彼女は部屋の中をせかせかと行き来した。

召使が入って来て，夕食を告げた。

「フェルディナンドは戻りましたか？」急いでマチルダが尋ねた。

召使が否定した。彼女は深いため息をついて，自分の額を叩いた。

外の控えの間に足音が聞えた。

「戻って来たのね，フェルディナンド！」彼が入って来るとマチルダが歓喜して叫んだ。「それで，どうでした，ヴェレッツィは見つかりましたか。ああ！　早く言って！　この恐ろしいあやふやな状態から私を楽にして」

「奥様」フェルディナンドが言った。「とても残念ですが，あらゆる努力をしましてもヴェ

レッツィ伯爵を見つけるには至りませんでした――」

「ああ，気が違いそう！」マチルダが叫んだ。「私が罪の暗い深遠に飛び込んだのはこのためなの？――女性としての慎み深さを軽蔑し，結果を恐れず，私をひどく嫌う人に，私を遠ざける人に――むごいヴェレッツィのように――愛を捧げたのはこのためなの？　でも，もしあの人がパッサウにいるのなら――もしこの町の近郊にいるのなら，私はあの人を見つけます」

このように言うと，召使たちの諫める声にも耳を貸さず，一切の礼節を打ち捨て，彼女はパッサウの街の中に駆け出した。陰気な静寂が町の通り一帯を支配していた。真夜中を過ぎ，住民たちは眠りに――マチルダには無縁の眠りに――飲み込まれているようだった。白いローブが夜風に漂い，影のような，乱れた髪の毛が体に垂れ下がっていた。彼女が橋を渡る時，その姿は下にいる舟人にはこの世のものならぬ霊ではないかと思えた。

彼女は足早に橋を渡ると，右手の野に入った。自分が辿っている方向がほとんど分からず，マチルダは川の土手に沿って早足に歩いた。風にかき乱されることはほとんどなく静かに流れるダニューブ川が彼女の均整のとれた姿を映しだした。望みのない愛で逆上している彼女の頭を突然の恐怖，抗しがたい絶望が捕らえた。

「この世で私は何をしなければならないの？　私の晴れやかな未来が損なわれ，愛の甘い希望が虚しくなったのに？」絶望の極みに至った狂乱状態のマチルダはこう叫ぶと，川に飛び込もうとした。

しかし生命は逃れた。というのも，マチルダは誰れかに腕をつかまれ，その絶望的な行為を引き止められたのだ。

恐怖に打ちのめされて，彼女は気を失った。

しばらくの間，彼女は意識の無い無感覚の状態で横たわっていたが，やがてその人物がコップを水で満たして青ざめた顔にかけると，哀れなマチルダは意識を取り戻した。

月の光が彼女の目にヴェレッツィの顔を明らかにした時，彼女はどんなに驚いたことか，歓喜と疑念とが入り交じったその感情をどう言い表わせばよいだろう！　彼は心配そうに気遣って，彼女の均整のとれた優美な体の上にかがみ込んでいた。

「何という偶然でしょう」ヴェレッツィが驚いて叫んだ。「ここでラウレンティーニ伯爵夫人にお目にかかるとは。あなたとはイタリアの城館でお別れしたのではなかったでしょうか？　私がこの身を他の人に捧げていることはどうしようもありませんとあなたに告げた時，あなたが私を悩ませるのを止めてくださることを願っていました」

「ああ，ヴェレッツィ！」彼の足下に身を投げ出しながらマチルダが叫んだ。「気がおかしくなるくらいあなたを崇めています――気が狂うくらいあなたを愛しています。もしあなたに憐れみというものがあるのでしたら，私の求愛を虚しくしないでください――宿命的な，抗しがたい情熱に駆られていて，それに打ち勝つことは不可能だと感じている者を拒絶しないでください」

「立ち上がってください」ヴェレッツィが言葉を返した。「立ち上がってください。このやりとりは普通ではありません。あなたのような身分にある人の品位に，また女性の慎み深さにふさわしくありません。ところで，あなたを向こうの田舎家に連れて行かせてください。そこで休息して元気を取り戻されてはどうでしょう，あるいは一晩過ごされてはどうでしょう」

ヴェレッツィが自分の住んでいる質素な住居に美しいマチルダを無言で案内して行く時，月の光はダニューブ川の静かな水面で戯れていた。

クラウディーネは戸口で待って，ヴェレッツィに何か良くないことが起きたのではないかと心配し始めていた。というのは，ヴェレッツィが家の戸口に着いた時にはいつもの帰宅時間はとうの昔に過ぎていたから。

あたりが涼しくなる黄昏時に近くの豊かな景色の中をぶらぶら歩くのが彼の習慣だったが，真夜中まで散歩を延ばすことはめったになかった。

彼はクラウディーネに歩み寄る時，気を失いかけているマチルダの体を支えていた。非常に高齢なので老女の目は最近見えなくなっていた。それで，ヴェレッツィが彼女の名前を呼んだ時に初めて，ラウレンティーニ伯爵夫人を伴っている彼の姿が見えた。

「クラウディーネ」ヴェレッツィが言った。「あなたは親切にしてくれているが，もう一つお願いがある。自分の知らない所に迷い込まれたこのご婦人は，私たちの家で一夜を過ごされる。私がいつも使っているベッドをこの方に用意してくれたら，今晩私は芝土の上で休むことにし，用意してくれた夕食をこれから取ろう。奥様」彼はマチルダに向かって言葉を続けた。「ワインを少し飲めば気分がよくなるでしょう。グラスにワインを注がせてください」

マチルダは黙って彼の申し出を受けた。二人の目が合った。マチルダの目はきらめき，意味ありげだった。

「ヴェレッツィ！」マチルダは叫んだ。「私がパッサウに着いてまだ四日にしかなりませんが，あなたのことを懸命に尋ねました――そうです，とても懸命に！　明日，パッサウへ一緒に来てくれますか」

「ええ」ヴェレッツィがためらいながら答えた。

クラウディアがまもなく二人に加わった。マチルダは自分の画策がうまくいったことで有頂天になっていたが，クラウディーネの前なので，話題は一般的な方向に向かった。ついに遅い時刻になり，彼らに別々になった。

一人になり考えに耽るに任されたヴェレッツィは，ダニューブ川へと下に向かって延びている芝土の上に身を投げ出した。暗澹とした考えが彼の心を捕らえた。彼はこの夕方の出来事の中にこの上なくつらい災難の発端を見た。

彼はマチルダを愛することはできなかった。これまで彼女を実に好ましい光の中でしか見たことがなかったが，よそよそしい尊敬以外の気持ちを抱くことは不可能だった。彼女の性格の中に，もし発達したら恐怖と嫌悪しかかき立てないような暗い影を見たことは彼は一度もなかった。彼女は激しい情熱の持ち主だと彼は感じていた。そういう女性はそういった情熱に力の限り抵抗しても，最後には流れに運び去られてしまう。彼女の輝かしい美徳は一つの欠点を覆い隠していて，それを彼は残念に思った。しかしそれでも，彼は彼女とユリアとを比較しないではいられなかった。ユリアの女性的な慎み深さはごくわずかな礼節の欠如にもひるんだ。彼女の華奢な体，えも言われぬ柔和な顔は，愛する者のえこひいきもあって，マチルダのきらめく目，威厳のある顔つき，大胆な表情に富んだ眼差しとは対照的だった。

次の日パッサウまで彼女に付き添って行かなければならない――歩いている間は絶対に沈黙を守る，あるいは，とにかく真意でない意味に取られるかも知れないようなあいまいな表情を見せない，と彼は心に決めた。

夜が過ぎ去った――朝が訪れ，遠くに見える山々の頂は朝日を受けて金色に輝いていた。

自分の画策がうまくいったことで有頂天になっていて，心の中の生気にあふれた気持ちをほとんど隠すこともできない狡猾なマチルダは，クラウディーネが質素な朝食を用意した狭い居間に早々と下りて行く時，沈んだ気分ではないのにそのように装った。

ヴェレッツィに対する彼女の態度には，無邪気で穏やかな優しさが際立っていた。視線は地面に向けられ，彼女の動きの一つ一つが従順さとこまやかな感情を物語っていた。

ついに朝食が終わり，マチルダがヴェレッツィに付き添われて，川沿いの道を再度パッサウへと引き返す時が来た。陰気な沈黙がしばらく支配した――とうとうマチルダが口を開いた。

「冷酷なヴェレッツィ！　こんな風にあなたは私をいつまでも軽蔑するつもりですか？　このために私は女性の慎み深さを捨てて，隠すこともできないほどの激しい情熱をあなたに告白したのでしょうか？――ああ　少なくとも私を憐れんでください！　あなたを愛しています。ああ，気がおかしくなるくらいあなたを崇拝しています」

彼女は言葉を切った――彼女の黒い目に輝く独特の表情は，胸の内のひどく乱れた願望を物語っていた。

「そのような役に立たない言葉で」ヴェレッツィが言った。「ご自分も私も苦しめないでください。ユリアを愛する男に愛を語るのは」苦々しい軽蔑の笑みを顔に浮かべて，彼は続けた。「あなたのためですか――マチルダのためですか？」

マチルダの頬に涙が勢いよく流れた。彼女はため息をついた――そのため息は彼女の胸の奥底を引き裂いているようだった。

予想もしないその反応がヴェレッツィを打ちのめした。非難の言葉は覚悟していたが，マチルダの涙に彼の感情は立ち向かえなかった。

「ああ！　私を赦してください」ヴェレッツィは叫んだ。「失望のために気がおかしくなっている頭が心にもない言葉を言わせたのです」

「いいえ」マチルダが答えた「悪いのは私の方です。激しい情熱があのような言葉を言わせたのです。思い出してもぞっとします。ああ！　赦してください，不幸な女を赦してください。唯一の過ちは，あなたを愛しすぎたことなのです」

このように彼女が話した時，二人は人で混雑するパッサウの街に入った。足早に進んで行くと，まもなくラウレンティーニ伯爵夫人の宿に着いた。

第六章

マチルダの性格はすでにこれ以上詳細に話す必要がないくらい明らかになっている。その魔女のような幻影と頃合いを見計らった甘言はヴェレッツィの想像力に非常に大きな影響力を持ったので，日没前にクラウディーネの家に戻るという決意は一瞬ごとに薄れていった，と言えば事足りる。

「それでは，このように私を置き去りにするのですか」ヴェレッツィが立ち去ろうとすると，悲痛極まりない口調でマチルダが叫んだ。「このように予告もせずに私を置き去りにするのですか，ひたすらあなたのために高い身分の自負を捨てて，人知れず異国をさまよい歩いた者を？　ああ，もし私が（あなたへの愛に夢中になって）謙虚さの域を踏み外したとしても，私が，どうか私が，他の人に傷つけられないよ

うにしてください。お願いです，ここにいてください，ヴェレッツィ。もしまだ同情の火花があなたの胸に残っているのなら――ここにいてください。どうしようもなくあなたに身を捧げている私を虚しく求める人たちからを守ってください」

このような言葉で，狡猾なマチルダはヴェレッツィの心の広い情感に働きかけた。彼女の唯一の過ちは自分への愛であるとヴェレッツィは思っていたので，相手に対する憐れみ，同情から気弱になっていた彼の心は陥落した。

「ああ！　マチルダ」彼は言った。「私はあなたを愛することはできませんが――私の心が他の人に捧げられていることはどうしようもありません――それでも，信じてください。私はあなたを尊敬しています。あなたに敬服しています。ですから，とても多くの，とても輝かしい美徳に満ちた心が，その価値を認めることができない者にだけ向けられているのは悲しいです」

時が過ぎ行き太陽が日々戻ってきても，ヴェレッツィはまだパッサウにいた。まだマチルダの屋根の下にいた。その優しさ，その溶けるような思いやり（それをどのように装うかを彼女はよく心得ていた）によって，ヴェレッツィは自分の心が彼女に対する無意識の嫌悪感に満ちているのは不当だと強く思い始めた。彼女の会話は良識と的確な考えにあふれていた。彼女は涼しい夕方には楽器を演奏した。また日没後にしばしば，豊かな景観とダニューブ川に洗われる繁茂した牧草地の中に二人でぶらぶらと歩いて行った。

クラウディーネのことは忘れられていなかった。実際，マチルダが彼女のことを最初に思い出した。そして彼女を自立した境遇に置くことで，ヴェレッツィの感謝の気持ちをさらに大きくした。

このようにして三週間が過ぎ去った。とりこになったヴェレッツィを自分の屋根の下に引き止めるために，毎日マチルダは新たな手練手管を用い，新たな甘言を弄した。

ヴェレッツィの精神が追憶によって動揺するのにマチルダが気づいた時，パッサウの最上流階級の人たちが優雅に調和した足どりで踊った。

彼が孤独を好むように思える時，ダニューブ川沿いの月明かりの散歩をマチルダは提案した。また，彼女は巧みな指でハープから琴線に触れるこの上なく魅惑的なメロディを紡ぎだした。彼に対するマチルダの振舞いは優しく，愛情がこもり，物静かだった。それは，彼女の胸の中に密かに燃えている熱烈で，消しがたい火というよりは，むしろ友人か姉妹の愛情の特徴である穏やかさと落ち着きに色どられているようだった。

ある静かな夕べのことだった。マチルダとヴェレッツィは，すべるように流れるダニューブ川を見下ろす奥の広間に座っていた。ヴェレッツィはマチルダが得意の静かなアリアを歌うのを夢中になって，うっとりと黙って聞いていた。その時，玄関の広間の扉を叩く大きな音がして，二人は驚いた。召使が入って来て，訪問客が特別の用事でマチルダと話すために待っている，と告げた。

「ああ！」マチルダが叫んだ。「今はその人の相手ができません。待つように言いなさい」

訪問客は執拗で，どうしても断れなかった。

「では，入ってもらいなさい」マチルダが言った。

召使は急いで彼女の指図に従った。

ヴェレッツィは部屋を出ようと立ち上がっていた。「いいえ」マチルダが叫んだ。「座ってい

てください。その人をすぐに帰らせます。それに，あなたに秘密にしておくことは私には何もありません」

廊下に通じる広い折り戸は開いていた。

その間からマチルダがじっと見据えて青ざめるのに，ヴェレッツィは気づいた。

彼は広間の反対側のソファに座っていたので，その原因を見ることができなかった。

突然，彼女は椅子から立ち上がった。扉を通って駆け出して行く時，動揺のために全身が痙攣しているように思えた。

ヴェレッツィは興奮した叫び声を聞いた。「帰りなさい！　帰りなさい！――明日の朝に！」

マチルダが戻ってきた。彼女は中断したハープの前に再び腰を下ろし，気持ちを静めようとした。しかし無駄だった――余りにも動揺していた。

再び歌おうとした時，声はその機能を果たせなかった。それに，湿った手はハープの弦をかき鳴らす時激しく震えていた。

「マチルダ」ヴェレッツィが思いやりを込めた声で言った。「何を動揺しているのですか？　あなたの悲しみを私に打ち明けてください。できることなら，それを軽くしてあげたい」

「いいえ」と，無頓着を装ってマチルダが言った。「何もありません。何も起きていません。自分が動揺した様子であることも気づきませんでした。」

ヴェレッツィは彼女の言葉を信じるふりをし，平静ではなかったがそのように装った。話題が変わり，マチルダはいつもの態度を見せた。時刻も遅くなり，ついに二人は別々になった。

夕方の出来事について考えれば考えるほど，ヴェレッツィは，自分自身にも説明できないものの，マチルダの動揺は何か重要なことから生じたのだという確信が心の中でいっそう強まった。通常の状況や並の人を動揺させるかも知れない偶発的な出来事を，マチルダの精神が超越しているのを彼は知っていた。それに，彼女が口にするのを自分が聞いた――「帰りなさい！

帰りなさい！――明日の朝に！」――という言葉。それで，彼は自分の本当の気持ちを隠してその話題が終わったように見せかけようと心に決めたけれども，マチルダの行動を念入りに吟味し，とりわけ次の朝に起きることを知ろうと決心した。何か恐ろしいことが起ころうとしているという，言葉に表せない予感でヴェレッツィの心は一杯になった。その後に次々と追憶が長く続いた――彼はユリアと過ごした幸せな時を忘れることができなかった。人を引きつける彼女の優しさ，この世のものとは思えない姿が彼のうずく感覚にのしかかってきた。

それでも，彼は心がマチルダに対して和らぐのに抵抗できなかった――彼女の愛が彼の虚栄心をくすぐった。彼女に愛情を返す気持ちにはなれなかったが，以前の品位を落とした境遇から自分を救い出してくれた彼女の親切，自分に対する改められた態度，また何事においても自分を喜ばせよう，機嫌を取ろうと絶え間なく努めていることに，彼は心の底から感謝しなければならないと感じた。

朝がやって来た。眠りの訪れることのなかった寝椅子からヴェレッツィが起き上がり，朝食の部屋に降りて行くと，そこにマチルダがいた。

彼は努めていつもと変わらぬ様子を見せようとしたが，無駄だった。というのも，彼の顔には遠慮と詮索の気持ちがはっきりと表れていたから。

マチルダはそれに気づき，彼の鋭い眼差しに当惑して，たじろいだ。

食事は無言のまま終わった。

「一，二時間失礼します」ようやくマチルダが口ごもりながら言った。「執事が勘定を清算しなければなりません」それから，彼女は部屋を出て行った。

前日マチルダの動揺の原因となった訪問客が今その要件を済ませるために再訪したことを，ヴェレッツィはもう疑わなかった。

彼女の後から彼は扉の方へ向かった――彼は立ち止まった。

「どんな権利があって，私は他人の秘密を詮索しようとするのだ？」ヴェレッツィは思った。「それに，この訪問客との用件が私に関わるとは限らない」

それでも，抗しがたく魅了されて，彼には大きな謎に思えることを，言わば解明したいと思った。彼は彼女が明言したとおりのことだと信じようとした。彼は気を静めようとし，本を手に取ったが，目は少しずつ逸れていった。

三度彼はためらった。三度彼はその部屋の扉を閉めた。最後には，自分自身にも説明できない好奇心に駆り立てられ，マチルダを探し求めた。

無意識に彼は廊下に沿って進んだ。召使の一人に出会うと，マチルダがどこにいるのか尋ねた。

「大広間です」が返答だった。

震える足どりで，彼はそこに向かって進んだ。折り戸は開いていた。マチルダと訪問客がその部屋の，遠く離れた向こうの端に立っているのが見えた。

そびえるような堂々とした訪問客の姿は，そばの大理石のテーブルに寄りかかっているマチルダの均整のとれた優美な体によって，いっそう奇妙に際立っていた。彼と言葉を交わしている彼女の仕草は，これ以上ないくらいの強い苛立ち，深い関心を示していた。

非常に遠く離れていたので，ヴェレッツィは彼らの会話を聞くことができなかった。しかし，時折耳に届く小さなささやきから，話題が何であれ，二人とも同じように関心を持っていることがわかった。

しばらくの間彼は驚きと好奇心の入り交じった気持ちで二人をじっと見ていた。彼はアーチ型天井の広大な部屋の中を通り抜けて漂ってくる，二人の混乱したささやきから意味を汲み取ろうしたが，明瞭な音は彼の耳には届かなかった。

ついにマチルダが訪問客の手を取った。彼女は気持ちを込めた熱烈な仕草で，それを唇に押しあてた。それから，彼を広間の反対側のドアに導いた。

突然訪問客は振り返ったが，そのドアを通って出て行く時すばやく元の姿勢に戻った。しかしながら，訪問客の火を放つような目で，それがヒースの野にある田舎家で永遠の敵意を宣言した者だとヴェレッツィが認めるには十分だった。

自分がどこにいるのか，あるいは何を信じたらよいのかほとんど分からず，束の間ヴェレッツィは困惑して立ちつくし，頭に浮かんでは彼の恐怖におびえた想像力を攻めたてる考えを整理することができなかった。何を信じたらよいのか分からなかった――ザストロッツィの姿をして，自分の張りつめた眼球を攻めたてたのは，いかなる幻想なのだろうか？――本当にザストロッツィだということがあり得るだろうか？　限りない恨みのある敵が，最も憎い敵が，不誠実なマチルダにこのように愛され，このように信頼されることなどあり得るだろうか？

しばらくの間，彼は決定しなければならない

ことを疑いながら立っていた。一時は，マチルダの裏切りと卑劣さを非難し，邪悪な行為の只中で彼女をやり込めようと心に決めた。しかし最後には，気づかないふりをして，自分の感情を抑えるほうがもっと分別があるという結論に達した。彼は元の朝食の部屋に入ると，何もなかったかのように，仕上げないままになっていたスケッチの前に座った。

それに，たぶんマチルダは非難されるようなことをしていないのだろう。彼女は欺かれているのだろう。だから，自分を破滅させようとする極悪非道のたくらみが準備されていても，彼女は騙されているであって，ザストロッツィの手先ではないのだろう。彼女は無実であるという考えが彼を慰めた。というのは，彼は心の中で彼女に対するこれまでの自分の不当な扱いをやましく思い，その埋め合わせをしたいと思っていたから。彼女に対してしばしば，自らの意志に反して，不愉快な考え，説明できない憎悪に心が満たされるのを克服できなかったが，彼は想像力の幻想に過ぎないと考えているものに打ち勝ち，彼女の徳に対してそれにふさわしい，正当な賛辞を呈したいと思っていた。

混乱して一貫性はないけれども，このような考えがヴェレッツィは脳裏をよぎっている間に，マチルダが再び部屋に入って来た。

ヴェレッツィに何か瑣末なことを早口で尋ね，彼のそばの椅子に座り込んだ時，彼女の顔つきは激しい動揺の痕跡を示し，その黒い目は言いようのない，混乱した意味に満ちていた。

「ヴェレッツィ！」二人に同じように苦痛である沈黙の後，マチルダが叫んだ。「ヴェレッツィ！　悪い知らせを伝えるのを私は心から悲しみます。できることなら，その致命的な真実をあなた伝えないでおきたい。けれでも，それは何か他の手段で覚悟のできていないあなたの耳に届くかも知れません。恐ろしい，衝撃的なことを話さねばなりません。その話に耐えられるでしょうか」

力のぬけたヴェレッツィの指から鉛筆が落ちた――彼はマチルダの手をつかみ，恐怖でほとんど言葉になっていない口調で，彼女の恐ろしい憶測を説明してくれるよう懇願した。

「ああ，友！　私の妹が」見せかけの涙が頬に勢いよく流れる時に，マチルダが叫んだ。「ああ，彼女が――」

「何ですって！」ヴェレッツィが遮った。自分の崇拝するユリアの身に何かが降りかかったという考えが，正気を失った彼の頭を十倍もの恐怖で満たした。というのは，しばしばマチルダが，自分は彼の妻になれないのだから喜んで彼の友になると言い，ユリアを自分の妹と呼んでいたから。

「ああ！」両手の中に顔を埋めながらマチルダが叫んだ。「ユリアが――あなたの愛するユリアが――死にました」

突然，ぞっとするような恐怖に襲われて体の機能が失せていくのを止められず，ヴェレッツィは前に崩れていき，気を失ってマチルダの足下に倒れた。

彼を回復させようとするあらゆる努力もしばらくは無駄だった。投与されたあらゆる気付け薬は，長い時間効果がなかった。ようやく，彼の唇が開いた――前よりも楽に呼吸するように見えた――彼は動き，ゆっくりと目を開いた。